熊本地震緊急・復興支援

4月14日、16日と震度7を超える地震が熊本県で発生し、多くの方が被災されました。わかちあいプロジェクトは、特定非営利活動法人ジャパン・プラットフォームの助成を受け、「熊本地震日本福音ルーテル教会九州教区対策本部」と協働し、支援を行いました。

益城町の広安愛児園避難所を拠点に、被災者向けの談話スペースの設置・運営と食事支援、瓦礫や倒壊した建物、壊れた家財道具などの震災廃棄物の収集・運搬作業を行いました。談話スペースでは、カフェのようにコーヒーや紅茶をお出しし、被災された方々が少しでもほっとできる場を設けました。顔を会わせて被災者の方々と直接話すことで、様々なニーズがあることを知り、できるだけの支援に取り組みました。被災者が公的な支援を受けるために必要な、証明書の取得や仮設住宅の申込み等のために役場にお連れしたことや、すべての家財道具を失ってしまった被災者をホームセンターや100円ショップにお連れすることもありました。食事支援は、毎日続くコンビニ弁当に飽きてしまった被災者に、野菜を中心とした副菜を提供し、大変喜んでいただきました。被災者の個人宅を訪問して実施する災害廃棄物の収集・運搬活動は、現場をよく知る自治会の区長と協力し、高齢者世帯などの震災弱者を中心に支援しました。

地震で被害を受けた家屋の外壁を壊し、収集して片付ける現地スタッフ

Special Thanks

武田薬品工業㈱様ご提供のアリナミンVで元気をいただき、支援活動を頑張りました。日産自動車㈱様より無償でお借りした電気自動車は、バスなどの公共移動手段が限られる中、大変役立ちました。また、ソフトバンクグループ㈱様より携帯電話1機（通話料含む）を、無償でお借りし、よりスムーズに支援を行えました。

わかちあいプロジェクトについて

フェアトレードや難民支援活動を通して、開発途上国の人々を支える国際協力NGOです。私たちは1992年にドイツを訪問した際にフェアトレードのしくみを知り、日本で最初の国際フェアトレード認証コーヒー（カフェ・マム）の販売を開始しました。世界中から製品を取り寄せ、国内では最も多くの国際フェアトレード認証製品を取り扱っており、様々な地域の生産者の自立につなげています。また同じ頃、アフリカ・ソマリア難民救援をきっかけに継続的に難民支援活動に取り組み、現在までアジアやアフリカ、中東の難民生活を余儀なくされる方たちを支援しています。

❶ 国際フェアトレード認証製品の輸入、商品開発、販売
❷ 難民支援活動（古着支援、緊急支援）
❸ 途上国の自立支援

活動の詳細はホームページよりご覧ください。
http://www.wakachiai.com/

募金のご協力をお願いします

① **わかちあいプロジェクト募金**（一般募金）
② **古着支援**（難民古着支援プロジェクト活動費等）
③ **ミャンマー支援**（教育支援、自立支援）
④ **南スーダン支援**（Peace Palette活動支援）
⑤ **シリア・イラク支援**（難民支援）

募金の送付先

郵便振替口座
一般社団法人わかちあいプロジェクト募金　00120-4-386390
（※通信欄に上記募金の種類をご記入ください）

Fair Select
FAIR TRADE ONLINE SHOP

わかちあいプロジェクトの
フェアトレードオンラインショップが
リニューアルオープンしました！

お買い物で途上国の生産者の自立を支える
フェアトレードをぜひご利用ください。

http://fairselect.jp

わかちあいプロジェクトNEWS No.32 2016 December（年1回発行）

デザイン　Design Convivia

発行元　**一般社団法人わかちあいプロジェクト**
135-0001 東京都江東区毛利2-2-8誠和ビル
TEL：03-3634-7809　FAX：03-3634-7808

わかちあいプロジェクト

わかちあいプロジェクト NEWS No.32

2016 December

ミャンマーカヤー州の学校で

私たちが取り組んだ教育支援と現在の奨学金プログラム

松木 傑　わかちあいプロジェクト代表

1992年夏から活動をはじめたわかちあいプロジェクトの最初の教育支援は、1994年夏にケニアのカクマ難民キャンプで行った幼稚園建設のワークキャンプでした。その後毎年夏に40日間のワークキャンプを続け、2002年を最後に終わっています。その間、スポーツや演芸など青年とかかわる活動を行ってきました。その当時の難民であった2人の青年がアメリカ、オーストラリアに移住して大学教育を受け、いまでは南スーダンで教育活動やNGO活動に従事しています。現在まで、15年近く人とのつながりを持つことができたのが何よりの喜びであり、やりがいになっています。

1999年からカンボジアでワークキャンプを行い学校建設に従事しました。建築は現地の業者が行い、それに参加する形のワークキャンプで毎年、簡単な村の小学校を2校ずつ建設しました。2006年まで行いました。意義ある働きでしたが、毎年同じことの繰り返しで、カンボジアの人との継続的な関係も出来ないままでした。そのことにあきたらなさがあって、現在も関係が続いていますミャンマーでの教育支援を2008年から、カヤバプテスト教会のミャーさんと続けています。当初の目的でした学生寮の建設は実現していませんが、一昨年から奨学金による支援を始めています。

今年6月、ミャンマー、カヤー州の州都、ロイコーで奨学金を受けている学生と父母の集まりに参加することができました。一人ひとりの家族の困難な状況や、いかに私たちの奨学金が役立っているか、直接、お聞きすることができました。奨学金を受けて教育を続けたい子供たちがいっぱいいます。ぜひ、皆様のご協力をお願いいたします。

ミャンマーカヤー州

山岳で暮らす少数民族の支援活動

ミャンマー連邦共和国カヤー州は、タイと国境を接した山岳地帯にあります。多民族国家のミャンマーでは、少数民族の迫害や、宗教間の対立、紛争などが起こり、地域の発展を拒んでいます。今世紀に入ってからも、武力衝突に巻き込まれて家を焼き払われ、住む場所を失ったり、生活のために娘を売ってお金にしたり、貧しさにより教育や医療を受けることを諦めたりすることが起こっていました。

そのような状況を変えるため、わかちあいプロジェクトは、カヤー州出身でアジア学院（栃木県）の卒業生のリー・ミャーさんの協力により、山岳地域で暮らす少数民族の人々を支える活動を2007年から行ってきました。

2007年には、団体設立当初から実施していた古着支援の寄付先として、新たにタイ・ミャンマー国境にある9つの難民キャンプを選び、日本で集めた古着の寄付を始めました。2008年からは、カヤー州で暮らす子どもたちが学校に通えるよう、学生寮の支援や奨学金の支給を継続して行っています。2009 年には現地に土地を取得して、井戸を掘削し、コーヒーや果物の木などを植え、人々の自立のための収入源を作り出すことを目指しています。

今現在、タイの難民キャンプに避難して暮らす人々を古着支援で支えるとともに、人々が郷里に戻った時に、教育や収入を得る手段があるよう、ミャンマー側での活動も続けています。

難民古着支援プロジェクト

タイとミャンマーの国境には、政府軍と少数民族との間で起こった紛争や人権侵害から避難するために、9つの難民キャンプで約10万人の人々が暮らしています。難民キャンプでは、各国の支援機関により、食糧や住居、医療や出産などは保護されていますが、それ以外の支援が行き届きにくい場所も多くなっています。特に衣類は贅沢品で、必要最低限の服を除いて、質の良い洋服を手に入れることは難しくなっています。

わかちあいプロジェクトでは、2016年度の第24回難民古着支援プロジェクトにより、日本全国から集まった、8610箱分の衣類を難民キャンプで暮らす人々へ届けました。6月に受付した衣類を、コンテナ船でバンコクへ運び、受け入れ団体のTBC（The Border Consortium）に引き渡します。そこからトラックで9つの難民キャンプへ分配し、8月～ 11月の間にそれぞれのキャンプで難民への配布が行われました。

日本の衣類は生地がしっかりしていて、デザインも良く、年に1度の配布を非常に喜んでいただいています。たくさんの方のご協力をありがとうございました。来年も引き続きご支援をお願いいたします。

私の名前はコーといいます。私は1997年、ビルマ（ミャンマー）の国境の紛争から逃げて、このキャンプにやってきました。服は高価なので、難民の私にとってそれを手に入れるのはとても難しいことです。そんな中でわかちあいプロジェクトから届く服は、とてもきれいでかっこよくて、本当に価値のあるものです。

今着ているこの長袖シャツ、とっても重宝しています（似合ってる？）。

お返しできるものは何もありませんが、このような服を寄付してくれた皆さまに大きな感謝を伝え、皆さまの幸福を心からお祈りしています。本当にありがとうございました！

ミャンマー教育支援　学生へ奨学金の支給

松木 傑

山岳地域のカヤー州では、学校が家から遠く、小学生の時から寮で生活する子どもや、貧しくて学校に通うことができない子どももいます。そのような子どもが学校に通って勉強できるよう、小中高校に通う20名の学生（男子6名・女子14名）に奨学金を支給しました。

◆

奨学金を支給した学生のひとり、10年生のハイ・ブルーさんは、利発な顔立ちが印象的な女の子です。一緒に来ていたお母さんは、日焼けした農民の顔立ちをしていて、生活の苦労が垣間見えました。彼女は昨年、病気で一年間学校を休学しました。ミャンマーでは、病気になっても病院が十分になく、薬を服用するしかありません。自分の病気の体験から、将来薬剤師になりたいと言っていました。彼女の希望が実現できるよう、奨学金でサポートしていきます。

◆

高校の最上級生にあたる11年生のひとり、ボー・ラーさんは6人家族ですが、彼女もまた、希望を持つことができない困難を背負っています。お父さんが病気になり、村では治療を受けることができず、単身でタイ国境の難民キャンプで治療を受けています。彼女は学生寮で生活していますが、お母さんが寮長に、娘が奨学金を受けて学校に行けるよう、泣いて懇願されたそうです。

10年生のハイ・ブルーさん（左）に奨学金を授与しました

11年生のボー・ラーさん（左）と奨学金を待つ親子（右）

若者の希望を奪うミャンマーの教育制度

ロイコーに滞在中に、ミャンマーでは11学年を修了して高校を卒業できるのは、何と50%以下の学生だと聞きました。一度で卒業できず留年する学生も多いため、限られた支援の資金で、同じ学生を継続して支援するのか、あるいは必要としている新しい学生を支援するかという、難しい選択があります。高校を卒業できず、前にすすめない若者が国中にあふれているのです。このエリート主義の教育制度を改革することが、ミャンマーには必要なのではないかと思います。わかちあいプロジェクトでは今回、11年生で卒業できなかった学生を、切り捨てずに続けて支援することとしました。奨学金を受けて教育を続けたい子供たちが大勢います。ぜひ、皆様のご協力をお願いいたします。

コーヒー栽培支援事業

昨年に引き続き、カヤー州ドービャク村とヤイブラ村の2村で、コーヒー栽培の技術指導および生産者組合設立支援活動を行っています。新メンバーの農民を加え、各村12名で活動しています。昨年からのメンバーを中心に、コーヒーの種（豆）を蒔き、発芽させ、苗床に移植し、苗を育て、ある程度大きくなった苗をそれぞれの農園に移植するといった、一連の作業を、自分たちでこなせるようになりました。共同の作業場である苗場での水やり等管理も、自分たちでローテーションを組み、しっかり苗を共同で育てています。

ドービャク村では、農民たちが従来から植えていたコーヒーの木を用いて、コーヒーチェリー（実）の摘み方や収穫後の果肉除去、乾燥方法など、商品化するための収穫指導を昨年から行いました。今年6月には、そのコーヒー豆を日本に輸入し、わかちあいプロジェクトから販売しています。指導の成果が少しずつ味に表れてきています。より美味しいコーヒー栽培を目指していますので、彼らの頑張りを味わっていただき、末永く見守っていただければと思います。

コーヒー豆の選別を学ぶメンバーの農民たち

ミャンマー産焙煎コーヒーの「カヤーリーコーヒー」は、酸味とコクのバランスがよくとれた味に仕上がっています。

現地語で作ったコーヒー栽培ハンドブック